るようなものは、ほとんどとりあげられていないのである。したがつて、これは漢譯諸律の方が解釋を誤つたとみるのが妥當とかんがえられる。

最後に附錄として律藏に引用される經典の種類や性質を調査したものがまとめられており、卷末には二六頁にわたる英文の綱要、四一頁におよぶ邦語ならびに梵語パーリ語の索引がつけられて、間然するところなき體裁を具備している。

以上は若干の私見を加えつつ本書の概要をのべたにすぎないものであるが、尨大な律藏文獻をあまねく渉獵して、諸律の成立段階を克明にあとづけ、部派分裂前の原始僧伽、分裂後の部派僧伽に對する研究資料の性格を明かにしたことは、他の部門よりは遲れているとみられる律の研究に一大曙光をあたえたものということができる。著者の長年の努力に對して深甚の敬意を表すると同時に、この研究を足場として律藏の內容そのものの研究がいちだんと進み、冒頭にあげたような諸問題に對して解明せられる日の近いことを切望してやまない。

（A5・七九一頁・昭和三五年九月・山喜房書林發行・定價二、二〇〇圓）

佐藤哲英著

天台大師の研究

福島光哉

陳隋二朝にかけて活躍した天台大師智顗（五三八—五九七）が、北地の主禪佛教と南地の學解佛教とを綜合統一して教觀雙美の體系を確立し、以後の中國・日本の佛教思想に多大の影響を與えている事は周知の如くである。本著は此の天台大師が生涯に亘つて撰述したと云われる四十六部百八十八卷の現存する論著について、主として文獻學的立場から詳細に批判考證された大著であつて、佐藤哲英氏が三十餘年にわたつて研究せられた學位論文「天台智顗の著作に關する研究」の公刊である。

先ずその梗概を紹介すると

㈠「天台智顗の生涯と著作」は通じて本研究の序曲と云うべきである。智顗生存當時の社會的教學的背景から論を起し、天台大師別傳、唐高僧傳及び國清百錄を主要な資料として、智顗の生涯を幼少時代、修學時代、瓦官寺時代、天台隱棲時代、三大部講說時代、晩年時代の六期に分け、更に思想的觀點から天台隱棲時代迄の前期と三大部講說時代以後の後期とに二大區分を成し得るとする。前期は慧思の思想的感化が強く、般若空觀を根底においた禪法中心の實踐的傾向の強い時代であり、後期は華頂峯上の頭陀を一轉機として法華經の諸法實相觀に根底をおき、四教五時の教判や三諦三觀の思想に見られる智顗獨自の教學體系が確立せられる時代である。更に智顗の著作について親撰、眞說、假托の三分類を成し、㈡以降の詳細な研究への基本的態度を明らかにしている。

㈡「前期時代著作の研究」では、次第禪門、法華三昧懺儀、六妙法門、覺意三昧、方等三昧行法、法界次第初門、小止觀等について夫々の成立事情、思想的連關を詳細に檢討している。此の內代表的な著作は次第禪門十卷であつて、當時の智顗の思想的根據はここに見られ、他の諸著作は何れも本書の分出書か

要略書か入門書にあたるとする。前期思想の中心である次第禪門は智度論の諸法門を組織づけたもので、智度論第二十～第二十七卷と次第禪門修證章との本文的連關を指摘し、更に不説部分の推定にも及んでいる。又留意すべきは小止觀で、これは華嚴宗などでも珍重せられたが、天台隱棲時代に次第禪門の要略書として智顗自らまとめたものである。此の中に三觀思想を窺知し得るも未だ別教的隔歴次第の三觀であり、中道二諦の語は見えても未だ後期時代の圓融三諦の思想は現われていない。けれども次第禪門に於ける禪法をここでは止觀形式にまとめているので、摩訶止觀への過渡期的所産と考え得ると述べている事である。

㈢「天台三大部の研究」では三大部の説時説處を推定し、智顗の講説を門人の章安灌頂が智顗歿後に至つて整理修治している點に着眼して、現行の三大部は智顗自身の思想のみとは云い切れず、灌頂の私見が相當加えられたものではないかとの問題を提起している。先ず法華玄義は灌頂が聽記本を整理修治した際に、蓮華釋、簡宗體、記者私錄の部分は嘉祥寺吉藏の法華玄論を參照して增補した事を本文との連關を擧げて考證し、又智顗が玄義以後に講説したと考えられる摩訶止觀や四教義を參照している點を指摘して、本書の全文が直ちに智顗の思想と見做すのは危險であると述べている。次に法華文句も吉藏の法華玄論、法華義疏を參照批判しており、更に智顗が文句よりも七年後に講説した玄義を座右に置いて參照しているから、文句の修治本の完成は比較的遲く、その間に講説當初の內容がかなり變貌しているであろうと云う。摩訶止觀については荊溪湛然の輔行の説に據て、止觀に三本あつて題名も內容も少しく異つている部分がある事を重視し、その原初の形態が灌頂の觀心論疏の止觀説に傳えられているのではないかと推定している。然るに觀心論疏では四種三昧の行法も整備されず、一念三千説も完成されていないので、かかる摩訶止觀の中心思想も灌頂の功績になるのではないかと論じている。

㈣「經疏類の研究」では、先ず智顗の諸經疏に見られる釋風を述べ、維摩經疏、金光明經疏、觀音經疏、請觀音經疏、仁王經疏について各説している。維摩經疏は玄義六卷、文疏二十八卷とから成るが、從來の二回獻上説を覆えして其の間に今一度晉王に獻上した事實を國淸百錄によつて確かめて、現存の疏は第三回獻上本たる説を發表している。智顗晩年の著作の中で最も智顗の思想を明示している親撰の書と考えられるので資料的價値は高いと述べている。觀音經疏は玄義と義疏に分れるが、本書に紹介するのは新しい文獻學的立場から觀音玄義が灌頂の述作になるものであり、又請觀音經疏も灌頂の撰述と認められるから、以上兩著にのみ見られる性惡法門の説は智顗自身の思想でなく、灌頂によつて發揮せられたものであると主張する。次に仁王經疏については、吉藏の仁王疏と詳細に比較し、多くの本文的一致を認め得るのは吉藏の疏が天台の疏に影響を與えたもので、大唐內典錄（六六四）以後、從つて灌頂以後に一天台學者によつて述作せられたものだろうと云う。

㈤「淨土教關係著作の研究」では、大師別傳によつて智顗が法華信仰と共に彌陀信仰をもつていた事が知られるが、觀無量壽經疏、淨土十疑論等智顗の述作と傳えられる一連の淨土教關

係書は、淨影慧遠や道綽等の影響を受けていて、從來からも多くの僞撰論が出ているように何れも智顗の著作ではなく、七～八世紀頃に或る天台學徒によつて成されたものであつて、灌頂以後湛然迄の天台淨土教を察知し得る貴重な文獻であると結論している。

㈥「總說」に於いては㈠より㈤までの諸說を今一度纏めて結論を明らかにしている。

更に附說として「三諦三觀思想の起源及び發達」なる一論文が掲載されている。

以上の如き內容であるが、此の如き天台大師の著作に關する新しい文獻學的研究は佐藤氏の獨壇場であつて、從來ややもすると三大部偏重の嫌いがあつた此の研究分野に全く新しい指針を與えられた。極めて困難な仕事であるに拘らず、智顗の全著作に亘つて詳細に吟味檢討してその思想的變遷を明確に組織づけられ、又三大部や晩年の經疏類の成立事情を通じて多くの課題を提供せられた事は、今後の天台教學發展上重要な礎石となるであろう。

即ち三大部の成立については、灌頂が聽記本をもとに修治、再治する間に智顗の思想が灌頂によつて發展せしめられた事情を明らかにして、智顗と灌頂の思想を區別するに至つた。此のような事は從來天台宗學の上でも餘り問題として取り上げられず、多くの智顗の撰述は灌頂によつて筆記整理せられたものであるから、兩者の思想的區別を明らかにする研究は不可能に近く、又區別する必要もないとされて來たのである。

又性惡法門の思想を述べている觀音玄義、請觀音經疏が、灌頂の著作である事を明らかにする事により、此の思想は智顗の思想でなく灌頂の思想であると主張せられた事は注目すべき提唱である。元來此の思想は湛然以後天台教學の中心法門として尊重され、ことに知禮に於いては性具說や性惡說が特別重視された。しかるに江戸時代中期の普寂によつて、その著止觀復眞鈔などで、かかる性惡說が非倫理的な謬見であつて、智顗の他の所說と矛盾するとなし、此の思想が湛然や知禮の創作であると主張せられた。其の後此の僞作說に反論を加えて、智顗の三大部に見られる性具思想から性惡法門は當然導出せられる思想であると主張した人もあつた。今本著に於いてはこれらの議論とは別の角度から、觀音玄義や請觀音經疏が灌頂の述作と結論された事により新しい問題を投げかけたのである。けれども性惡說と三大部の中心思想たる十界互具說とは必然的な關係にあるから、觀音玄義等の僞撰が立證されただけで性惡說を天台大師と無關係とするのも穩當ではないので、今後智顗の根本的立場である性具思想と此の性惡法門との思想上の連關が更に討究せられる事により、一層の明快な解答を期せねばなるまい。

これからの智顗の研究に本著が一つの礎石として重要な意義をもつことは過言ではない。かかる見地より此の勞作が公開せられた意義は非常に大きく、從つて博士の功績を讃え且つ深く謝意を表すべきであろう。

（A5・八一二頁・昭和三六年三月
百華苑發行・定價一五〇〇圓）